

---

# 福井市自然史博物館

## 第1回 研究発表会要旨集

---

会期 2021年3月20日(土) 13時～16時

会場 福井市自然史博物館 3階レクチャーホール



福井市自然史博物館 研究発表会

-2021-

# プログラム

12:00 受付

13:00 開会挨拶

福井市自然史博物館 館長 坂靖志

## 第1部 13:05～14:35

13:05 星の見え方を調べよう ～市民参加型調査による星の見え方と夜空の明るさ・色の関係～  
加藤英行\*・金剛晴彦（福井市自然史博物館）

13:20 福井市足羽川流域の手取層の可能性 ―どのような可能性が？―  
安野敏勝（福井工業大学附属福井高等学校）

13:35 手取層群伊月層より産出する脊椎動物化石  
酒井佑輔（大野市教育委員会）

13:50 2019～2020年の西郷林道周辺の鳥類相  
柳町邦光\*・村上公輝・村上千夏子（日本野鳥の会福井県）

14:05 中山間地のため池における鳥類の高い種多様性  
出口翔大（福井市自然史博物館）

14:20 福井市足羽山の自然マップ活用状況 2020  
金剛晴彦（福井市自然史博物館）

休憩 14:35～14:45

## 第2部 14:45～16:00

14:45 福井県福井市に漂着したヒメウミガメおよび過去に福井県内で確認されたヒメウミガメの記録

小寺仁美\*・高島直子・久米田賢治  
（福井市自然史博物館ボランティア 骨格標本作製グループホネ部）

15:00 福井市足羽山におけるハムシ群集の多様性と季節消長  
梅村信哉（福井市自然史博物館）

15:15 アザミウマ及び研究報告の調査研究について  
柴田智広（福井市自然史博物館友の会）

15:30 淡水貝類聖地巡礼の旅 2020  
藤野勇馬（NPO 法人中池見ねっと）

15:45 モミの木は残るのか -足羽山における一考察-  
河崎晃博（福井市自然史博物館友の会）

16:00 閉会

\*は発表者

# 要旨

13:05～

## 星の見え方を調べよう ～市民参加型調査による星の見え方と夜空の明るさ・色の関係～

加藤英行\*・金剛晴彦（福井市自然史博物館）

2019年7月と2020年4月、8月において、市民参加型の星の見え方調査を実施した。調査の協力者から寄せられた報告から、福井市を中心とした星の見え方の分布を示し、福井市の中心市街地から遠ざかるほど星が見えやすくなる傾向を確認した。また、星の見え方に関係する基礎知見として、簡易分光器を用いた街灯調査を行い報告地点における街灯の種類と数、デジタルカメラを用いた夜空の明るさと色の調査から夜空が明るくなるほど青くなる傾向と福井市近隣でも21[mag/arcsec<sup>2</sup>]よりも暗く星空を観察しやすい環境があること、分光器を用いた夜空のスペクトル調査から測定地点において水銀の輝線を同定できたことを報告する。

13:20～

## 福井市足羽川流域の手取層の可能性 ーどのような可能性が？ー

安野敏勝（福井工業大学附属福井高等学校）

- ・ジュラ系：大石（1933, 手取植物群）、前田・堀（1950, アンモナイト化石、九頭竜亜層群）、前田（1961, 2編, 4累層区分）、Shikama(1969, 手取竜：キノボリトカゲ類)
- ・上部ジュラ～下部白亜系：山田ほか（2005）、山田ほか（2008, 二枚貝1種, 2層区分, 石徹白亜層群に, 上部ジュラ～下部白亜系）、安野（2004, 2005, 2008, 2009：多数の貝類化石・骨片・サメ類・硬鱗・カメ類背甲片・恐竜足印・鳥類足印）、Shimada et. al, 2008：恐竜足印・鳥類足印）、安野（印刷中, 両生類ーサンショウウオ類とオタマジャクシ幼生体と足印, ー・ワニ類と見られる足印, 恐竜足印)
- ・今後の課題：二足あるいは四足歩行の大型脊椎動物の遺骸化石は産出する可能性は？・・・

13:35～

## 手取層群伊月層より産出する脊椎動物化石

酒井佑輔（大野市教育委員会）

手取層群は、中部日本北部に分布する後期ジュラ紀～前期白亜紀の地層である。福井県大野市に分布する手取層群伊月層（前期白亜紀：約1億2700万年前）は、1996年に獣脚類恐竜ティラノサウルス類の前上顎骨歯が発見されたことで有名である。本発表では、これまでに伊月層より発見されている他の脊椎動物（魚類、トリティロドン類、トカゲ類、カメ類、コリストデラ類など）の化石について紹介する。伊月層の脊椎動物化石群集は、トリティロドン類とコリストデラ類の存在で特徴づけられ、石川県白山市の桑島化石壁（手取層群桑島層）の化石群集に比較される。

13:50～

### 2019～2020年の西郷林道周辺の鳥類相

柳町邦光\*・村上公輝・村上千夏子（日本野鳥の会福井県）

福井市西部に位置する丹生山地の北東端部に敷設されている西郷林道において、2019年秋季から2020年夏季の一年間に亘って、スポットセンサス法を用いて鳥類相を調査した。その結果、12目29科64種が確認され、その種構成は留鳥29種、夏鳥17種、冬鳥11種、旅鳥5種、漂鳥2種であった。その中に県域絶滅危惧種の12種が含まれていた。また秋季に46種、冬季に30種、春季に51種、夏季に39種が出現し、そのうち繁殖または繁殖の可能性が極めて高い種として31種が含まれていた。西郷林道周辺では、年間を通して多くの鳥類が生息し、春季には繁殖地として、渡りの時期には重要な休息地として利用している。今後も里山の自然環境を保全するために、継続的な調査が必要である。

14:05～

### 中山間地のため池における鳥類の高い種多様性

出口翔大（福井市自然史博物館）

近年、水田とため池などの耕作・管理放棄による農地の生物多様性の損失が懸念されている。日本の農地の7割が存在する中山間地において、各水域の鳥類多様性および、その保全価値や優先順位は明らかにされていない。そこで本研究は、新潟県の中山間地において水田、養鯉池、ため池の鳥類相を繁殖期、渡りの時期、非繁殖期に調査した。併せて水域の環境特性（水深、面積、畦の斜度、植被率など）も調べた。その結果、鳥の種数・個体数は一年を通して水田よりも池で多い傾向にあり、特に開放性・湿性の種類で一貫していた。種組成は時期で異なったものの、水域間で違いはなかった。また種数、個体数は水域の環境特性というよりは、ため池そのものが正に寄与する傾向にあった。これらより、ため池の保全の重要性および優先度が高いことが示唆された。

14:20～

### 福井市足羽山の自然マップ活用状況 2020

金剛晴彦（福井市自然史博物館）

2018年9月から福井市自然史博物館のエントランスホールに足羽山ビジターセンターが開設された。当ビジターセンターは、足羽山の自然、文化、歴史、観光、イベントの案内機能、休憩機能の充実を目的としている。このビジターセンター内に、来館者が足羽山で見かけた動植物の名前を書き込む「足羽山自然マップ」が設置された。2019年12月から2020年11月に記載されたデータを整理し、今後の足羽山自然マップの活用を分析し、今後にかさず問題点を考察した。

14:45～

### 福井県福井市に漂着したヒメウミガメおよび過去に福井県内で確認されたヒメウミガメの記録

小寺仁美\*・高島直子・久米田賢治

(福井市自然史博物館ボランティア 骨格標本作製グループホネ部)

ヒメウミガメ *Lepidochelys olivacea* は、爬虫綱カメ目ウミガメ科ヒメウミガメ属に分類されるカメである。本種は、太平洋・インド洋・大西洋の熱帯および亜熱帯海域に分布し、産卵地ではない日本に出現する目的やその回遊経路についての詳細は分かっていない。日本での発見は稀で福井県での漂着記録は1997年、2011年、2013年、2017年(林 2017)の4例のみである。2019年3月25日、福井県福井市の海岸で初めてヒメウミガメの漂着を確認したので、その概要を発表し、併せて福井県内のこれまでの漂着ヒメウミガメの記録も整理した。

15:00～

### 福井市足羽山におけるハムシ群集の多様性と季節消長

梅村信哉(福井市自然史博物館友の会)

福井市足羽山において2015年、2016年、2020年にルートセンサス法によってハムシ類を定量的に調査し、種構成や種多様性などの群集記載を行うとともに、県内の里山におけるハムシ群集との比較から足羽山のハムシ群集の特徴について考察した。3年間の調査を通して、70種1965個体のハムシ類が確認された。調査地間における多様度指数の比較ならびに重複度指数による検討から、県内の里山に比べて足羽山ではハムシ類の多様性が低く、その群集構造も里山と大きく異なっていることが明らかになった。また、食性(木本食種、草本食種、草本・木本食種、食性不明種)に基づくグループ別RI指数のレーダーチャートの比較から、足羽山では県内の里山に比べて草本食性のハムシ類の多様性が低いことが示された。

15:15～

### アザミウマ及び研究報告の調査研究について

柴田智広(福井市自然史博物館友の会)

アザミウマ目昆虫は体長1-3mm程の種が多く、棲息環境は多様である。世界に約6000種、日本に約450種が記録されている。アザミウマは生態も多様で単独性から真社会性種まで様々な生活様式を有する。近年各分野で研究は進展しているものの、見過ごされやすいグループであるため今後多くの発見が期待される。本発表ではアザミウマについて概要を述べ、次にアザミウマについて演者の興味のあるテーマを紹介するとともに現在進行中の福井県のアザミウマ相調査と *Bactrothrips* 属の調査研究についての概要を紹介する。

15:30～

### 淡水貝類聖地巡礼の旅 2020

藤野勇馬（NPO 法人中池見ねっと）

タニシやシジミなど、淡水で暮らす巻貝や二枚貝をまとめて淡水貝類と呼びます。

日本には「ミジンツボ」という殻長 2mm 以下の巻貝から、300mm 以上になる世界最大の淡水二枚貝「カラスガイ」まで、多様性に富んだ約 250 種もの淡水貝類が生息していますが、環境悪化や乱獲により数を減らしている種も少なくありません。

淡水貝類の不思議な魅力にとりつかれてしまった私は、2018 年ころから地域特有の種や特殊な環境に生息する種に出会うため、全国各地の「聖地」をめぐる旅をしています。

2020 年、コロナ禍の日本で新型コロナウイルス感染予防対策に苦心しながらも行った遠征の記録を、淡水貝類を中心とした生き物の写真とともに振り返ります。

15:45～

### モミの木は残るのか -足羽山における一考察-

河崎晃博（福井市自然史博物館友の会）

2020 年 8 月から 10 月、福井市足羽山の北側斜面尾根部においてモミを含む落葉広葉樹二次林の林分構造を明らかにするために毎木調査を行った。20m×20mの調査区を設置し、胸高（130 cm位置）以上の全幹を対象とした。調査の結果、合計 27 種、309 本の個体（幹）を確認した。種組成はヒサカキの幹数が最も多く全体の約 40%を占めた。林冠層を占めたのは、アベマキ・モミ・コナラの 3 種であり、この 3 種で胸高断面積合計比は約 80%を占めた。現在、林冠層に達していない遷移後期種のシラカシやタブノキと、林冠層構成樹種であるモミの前生稚樹を確認した。照葉樹の下層への侵入がある一方で、気象条件や人為的攪乱など様々な要因が絡み合っ、森林植生の変化が予測されると結論づけた。